哲學研究　第三百十二號

高山岩男氏『文化類型學研究』讀後

下程勇吉

本書は云ふまでもなく昭和十四年のはじめに刊行せられた「文化類型學」に內容上連續し、「哲學的人間學」につぐ大著である。「哲學的人間學」に於てその規模の廣大にして體系の龍骨の强靱なるを感じたものは、また本書に於て著者がその學に於て更に明晰さを加へて一段と觀自在の境に踏み入れることを感じるであらう。東西古今の文化類型を對比しその各々の特色を摘出し來る力强き概觀的把握こそは、惡しき感傷主義を微塵も許さゞる精進一路の學風と相俟つて、この獨自の領域を開拓して進む著者の立場を顯著に特色付けてゐる。時として人は文飾なく索漠たるが如き感じを受けるであらうが、それは著者があくまで「學」の立場に立ち事實自體に卽せんとするが故である。著者の感覺と學的努力は終始わざとらしさを避け作爲を忌み事實自體を明らかにせんとしてゐる。かゝる立場に立つ著者が本書に於て顯著に示してゐるものは、一に所謂日本學の學的闡明であり、第二に「事實主義」の立場の主張であると云へよう。

文化類型學なるものが其自身に於て窮極の哲學的立場ならざることは、著者自身が夙に明確に認められるところであるが、單なる外面的作爲の立場を去りあるがまゝの文化事象そのものを彼此對照してその本質を闡明せんとする著者の立場は、今日の我國に於て少からぬ意味をもつことは云ふまでもない。世界に於て自國の立場を樹立し自覺せんとしつゝある今日の我國に於ては、自國文化の本質を世界文化の聯關に於て究明することが切實に要求せられてゐる。あらゆる方面から「日本の自覺」は說かれることすでに久しきものがあるにもかゝはらず、眞に學的に公明なる立場に於て日本文化の歷史的本質を究明せるものは實に稀有である。世界史の自覺と相關的に日本精神の自覺を限りなく必要とすると高調する著者

は、卽物的感受性と力强き概觀的把握力とを以て東西古今の文化の特色を解明し、今日の知識階級をして一應承服せしめる程の水準に於て所謂日本學を基礎付け樹立する方向に力强き歩みを進めてゐる。少數の人々の一貫せる努力を除けば、從來所謂日本的なるものの日本的把握を誇稱する立場が兎角學的に不用意であり脆弱であり容易に人々を承服し得なかつたことは爭はれない。それ等の多くは徒らに誇大なる言辭を弄ぶ安易なるノミナリズムに止まるものにあらざれば、古色蒼然たる無秩序の方法に低徊し主觀的なる深さを出でざるものであつた。しかも今やこの歷史的轉換期に於ては、人も國も世界も均しくその歷史的具體的根源に溯源することを介して自由なる創造の視野を開き來るより外なき狀況におかれてゐる。この時にあたりては、自己文化の本質と精神を歷史的傳統の深底に於てあるがまゝに學的に把握することこそ、あらゆる意味の實踐を具體的ならしめる根柢を可能ならしめる。あらゆる意味の歷史哲學は深き傳統の眞實態に卽する自覺を缺くとき眞に充實せる實踐への通路を缺くであらう。かくの如き今日のしかも原理的なる要請に應へることは、徒らに自己と自國とを絕對化する安易なる無方法的立場の到底よくするところではない。眞に他を知る故に己を知り、又その逆の如き、歷史的生命に對する質實公明なる學的沈潛の努力のみが、かゝる時代の歷史的要請に原理的にこたへるのである。つとにディルタイより文化史的研究の方法と精神を、ヘーゲルより世界史の哲學の立場を攝取し來つた著者は、行くとして可ならざるはなき縱橫の研究を以て、かゝる今日の要請に自づとこたへるに至つたと云はれよう。

第二に本書を顯著に特色づけるものは著者の所謂事實主義の主張である。理よりも事に卽き、理性よりも事實自體に歸らんとし、又そこに日本文化の特色を認め、併せて自身の哲學的立脚點を求めんとするのは、本書を貫く著者の根本的態度に屬すると云へよう。しかし事實主義なるものが神學的乃至政治的權威性と苟合し絕對化せられるとき、それはあらゆる Schwärmerei に路を開くことは人の知るが如くである。卒直に云へば、ひたすらに事實そのものに卽かんとする著者が理事の對立を超えろ絕對事實を說くとき、時として人をしてかゝる境域を思はしめるが如き誤解の發生絕無とは云ひがたく、又「哲學的人間學」における著者の力說にもかゝはらず、

著者の立場は尙理性主義者や存在論者を十分承服せしめざるものを殘してゐると云はれよう。このことは恐らく著者の形而上學的立場が未だ十分に展開されてゐないことにもよると思はれるが、何れにしても、しかし、自國の國柄と文化とを無條件的に絶對化してあらゆる盲信と驕慢とに路を開くが如きは、著者の心情において到底許し得ざるところであり、又文化類型學と云ふ學的立場自體が本質的にこれを許さぬであらう。日本の文化と歷史とを貫く「事の絶對性」を說きながら、著者の立場は悲劇の盲目的自國絶對主義でも單純なる實證的事實主義でもない。「理を媒介として事に歸る」ことを明確に承認する點で、著者は哲學者としての立場を明かに貫いてゐるのである。事の理による媒介的把握性と相卽的に、著者の所謂事の理に對する高次性が成立するのであらう。かく一應理と對立しつゝ事が自らに歸るところに、實在における人間の認識活動も成立し、理事の對立的相卽性は人と實在とのそれと表裏し、こゝに理事の同一性が天人合一性と云ふ形而上學的規定を表面におし出して來る。この點におけるつきとめた究明が著者と理性主義者との間に殘るものを明かにすると思はれるのであるが、本書における最も深き形而上學的思索は天人合一の思想に存するであらう。著者によれば、主體と環境、國家と世界史等は天人合一の「呼應的一致」に於てその本質的生命を顯現すると考へられ、「個性」の範疇も人類文化の理想もひとしく「天人合一」の立場に成立するのである。「天の中にありながら單に天にあらざる人の道に、人生の創造を考へ、人間生活の建設を考へて、人間の力を初から軍要視しながら强烈な自我意識の如きものは成立しなかつたのである」云々と著者が語るが如きは、まことに日本文化のみならず東洋文化全般の特色を端的に語るものであらう。かゝる天人合一の思想こそは、歷史的に深く東洋哲學全體を貫いてゐるものであり、今日のアジヤの共存的統一を基礎付けるに足る哲學的原理として形而上學的深みを宿してゐると云はれるであらう。形而上學的根柢よりして深き歷史的創造の原理を可能にする思想にして、しかも歷史的に東洋民族全體の魂に深く觸れるものは、まさしく「天人合一」の哲學と云へるであらう。卽ちかゝる思想こそは、一卽多、多卽一、よく各人と各民族にその「所を得しめ」それぞれその「天」を全くせしめる原理を與へるであらう。日本藝術の——著

者の所謂――打てば響く象徴的簡潔性の構造の如きも、また天人合一性に依存してゐる。かゝる天人合一の卽物的主體性は著者の所謂事實主義の根柢を成すものであるが、それはもとより自づと成るものではない。理と事とが對立する面を缺ぎ得ぬが如く、人と天も亦對立する。本書自身が「天人合一の境は拱手傍觀して達せられるものではない」ことを明確に指摘してゐるのであるが、人をして自立無依よく天に迫らしめるものは、深き主體的鍛練を通じての創造的實踐以外の何ものでもない。かゝる卽物的主體的鍛練の道こそは古來我國のあらゆる領域に於て「道」として說かれ、言あげせぬ古人も深切なる敎を惜んでゐないのである。かゝる契機は我國の歷史的意識を具體的にする本質的要素の一つであつたと云へるかと思はれる。この點を拔きにして單に天人合一の事實主義を說くことは、我國本來の「道」に契合するものでもなく、國民の創造的實踐の根柢を深く大きく栽ふ所以ではないであらう。これらはたま〳〵本書讀過中の偶感にすぎないが、あらゆる領域に亙りて行くとして可ならざるはなき著者が學的卽物性を力强く追求するの間讀者に學への熱意と興味を喚起し、微塵の衒氣や匠氣をとゞめざる如きは、まことにその學がその人なる所以に基くであらう。文化類型の學的分析は著者の最も愛好せられる領域の一つであらうが、もとより歷史的文化の具體的生命はそれ自身重々無盡の深底と陰影とを宿し到底常識的概括乃至所謂 stoife Typenlehre にて盡すべからざるは、何よりも第一に事實主義を尊重する著者がよく理解せられるところであらう。無限の陰影と生命とを湛へる「事」を究める手段乃至手掛りとして「理」の立場に於て之を一應「水平化」せんとするものが文化類型學であるならば、それは眞の具體的實踐乃至歷史哲學を說く形而上學的立場への豫備的段階に屬するであらう。ます〳〵視野を擴大すると共に、精神的把握に於てもます〳〵コンデンスされた具體性に深まり、かゝる哲學窮極の問題の方向に步みを進められ學界を裨益せられることを祈るのは單に私一個の念願ではないであらう。著者の健在を祈る所以である。

――一七・二・一――